

Elizabeth Gaskell 著

A Dark Night's Work 論(1)

—敗残の人生を送る職業人 Wilkins 氏について—

中 村 祥 子

1. 執筆時期及び作品のテーマ

A Dark Night's Work (『或る暗い夜にやった事』 以下 *Night's Work* と略記) は、はずみで殺人を犯す attorney (不動産譲渡の手続きを扱う事務弁護士) の Wilkins 氏とその娘 Ellinor について描かれた、かなり長い中編小説である。最初 Charles Dickens の週刊雑誌 *All the Year Round* (『一年中』) に 1863年1月24日号から3月21日号まで9回にわたって連載され、その後1863年のうちに Smith, Elder and Co. (社) から1巻ものの単行本として刊行された。

このように *Night's Work* は作者にとって収穫の多かった1863年早々に出版されたが、この作品が実際にいつ執筆されたものであるかは問題になるところである。一般にこれは Gaskell の主として2通の手紙、

- a. [1862年9月末?]¹ の日付とみられる、George Smith (出版者)宛手紙 (L. 517)² で「(多分) 1巻本になる長さの物語で、ほとんど書き終えて4年間私の傍に置いてあった原稿」に言及し、「それを今春いわば未 completion だったが 'All the Year Round' に送った」と書いているもの
- b. ほゞ同じ頃と見られる [1862年] 9月30日付の名宛人不明の手紙 (L. 518) で、「私はもうすぐ 'All the Year Round' に1巻本になる長さの或

る物語を出そうとしている……。その題は‘A Night’s Work’である」と記述しているもの

から、1858年半ばに筋が構想され、かなりの部分が早く書かれていたのに中断され、結論部分のみ1862年秋に書かれたと見做されてきている。

1858年半ばといえば、“The Sin of a Father”（「父の罪」 *All the Year Round* の前身誌 *Household Words*（『身近な話』）の1858年11月27日号に出て、1860年に短編小説集に再録する時“Right at Last”（「遂に申し分なく」）と改題された）が書かれた頃である。“The Sin of a Father”のテーマは“子供の人格は父親の犯罪とは別問題である”というものであった。この時 Gaskell が、犯罪者の父親を持つ子供の物語を、“The Sin of a Father”とは全く別の形で、もう一つか二つ構想したということは大いにありそうである（作者はこの頃あと一作、Dickens の雑誌に原稿を送る義務を負っていた。後述する手紙②参照）。たとえば、その犯罪がもし殺人であった場合はどうなるか、その時父親の犯罪は子供にどう関わってくるか等の物語を。作者は既に *Mary Barton* でそういう問題を扱っているのだが、今度は作品の焦点を殺人事件そのものに移して描こうとしたかもしれない。

そのうちの一つは後に“The Grey Woman”（「灰色の髪の女」）として完成されたと思われる。この物語の枠組は、殺人犯人の父親を持つ娘に、母親が自らの半生を教えるというもので、これは *All the Year Round* の1861年1月5日号から19日号に3回に分載で出たが、既に1860年11月には Dickens の手に原稿が渡されていた。これはテーマと、舞台がドイツであるという点から考えて、“1858年秋に”構想されていた可能性が高い。そしてそのもう一つのヴァージョンが *Night’s Work* になったのかもしれない。

更に、“The Sin of a Father”で扱われている重要な問題に職業人の問題がある。当時は、紳士階級の人間に許された職業は、知的職業としての医者、弁護士、牧師であった。彼らのみ professional men（専門職職業人）として respectable な社会に受け入れられた（以下、本論で職業人とはこの専門職職業人のことを意味する）。職業人として有能な医者 Dr. Brown だからこそ、

彼にとっては文書偽造の罪で流刑に処せられた父親の存在は、決してマイナスに響くことはないのである。彼と結婚するヒロイン Margaret は「彼がどういう家柄の人であるかなど気にしません」(280)と言っている。これは個人の能力の評価がしばしば家柄や学歴等によって下されることへの作者の批判であり、ここには近代的な個人の能力は本人自身の資質によって正しく認められるべきだ(たとえ父親が犯罪人であっても)という作者の主張が述べられている。(そしてこれは後に *Wives and Daughters* (『妻たちと娘たち』) で同じく医者 Gibson 氏の描写に受け継がれていく問題でもある。)

この職業人の問題が、確かに *Night's Work* に色濃く影を落している。この作品では職業人は罪を犯す父親の方に割り振られているのであるが。先ず、Wilkins 氏は事務弁護士という一職業人で、彼が同じ弁護士でも法廷弁護士と違って社会的に地位が低い事務弁護士であった事が、後に彼が殺人を犯すに至る大きな原因の一つである。つまりこの作品は個人の能力が正しく評価されなかった職業人の悲劇と見ることができる。

このように *Night's Work* には1858年時点での作者の関心に直結する問題——父の罪、職業人の問題——が扱われている。しかし筆者には1858年に構想されたのはその辺りまでであったと思う。つまり1858年には父の罪、職業人の評価の問題を含む作品の大体の構想が練られたとしても、(一般に考えられているように)その時すぐに、かなりの部分が執筆されたのではなく、極く初期の段階で放置されたあと、暫く後に(早くても1859年秋以降)に大部分が書き継がれた、そして更に結論部分(といってもほぼ3分の1に当たる第12章辺りから終章の第16章)は1861年以降に書かれたと思われる。

ここで、もっと早くに書かれていたとする多くの論の根拠になる前述の Gaskell の手紙及び問題になる箇所を含む他の幾通かの手紙をもう少し詳しく見てみたい。作者が書きかけの作品に言及する時はたいていまだ表題が決っていないので“the story”等としか表現されていず、それがどの作品を指すかは執筆時期や前後の描写から判断するしかない。

① [1859年] 1月27日付手紙³ ——娘の Meta が母の代理で Charles Eliot

Norton（アメリカの芸術評論家）宛に書いたもの。

彼女 [Gaskell] が今 'Household Words' のために書いている物語……それはだいたい 'Lady Ludlow' 位の長さになると彼女は予想しています……。

'Lady Ludlow' というのは勿論 "My Lady Ludlow" のことで、1巻本の長さに相当する。

② [1859年] 3月9日付手紙 (L. 418) ——Gaskell 自身が Norton 宛に書いたもの。彼女は1858年の秋に旅先の Heidelberg へ Dickens から40ポンド前払いで送ってもらったために、その地で "The Sin of a Father" と "The Manchester Marriage" とを書いて送ったが、あと一作分（彼女の計算では18ポンド分）Dickens に借りがあった。

この間私は私の第三番目の物語を書いてきました——彼ら [Household Words 編集者] に私の負債——それが幾らになろうと——を払うために。しかし HW [Household Words] で約18ポンドになるだろうと思われる……私の原稿で約40ページの所で終るべきなのに、その物語はその辺りで終わってくれる代りに、それを200ページ以下に圧縮することはできないとすぐに私にはわかりました——そしてその100ページまでが既に書かれています。……私が現在書いているその物語は、何週にもわたって分載されるのに耐えるとは思いません。私はそれは一括で出版される方がずっとよいだろうと確信します。しかしそれは余り良いものではありません。筋が余りにもメロドラマ的で。ただ私は次第にそれに興味をもつようになっていて、それを脇へやることはできません。私はそれがアメリカで一括でか Atlantic 誌かで出版されればその方がずっとずいぶんいいのと思います。（それは本当に良いものというわけではないということに注意して下さい。私はそれはよく承知しています。欠陥は筋にあります。）（強調は原文）

Gaskell は続けて、それを Dickens の新しい週刊雑誌には出したいくないし、実際「私が今書いている物語は残念ながら余りに長いものなので」自分の借りのある分を大幅に越えると編集者に伝えたが、恐らく彼らはその物語を手に入れようとするだろう、と書いている。

ここで言及されている物語は二通り考えられている。一つは "Lois the Witch"（「魔女ロイス」）で、もう一つが *Night's Work* である。前者について

は、Dickens の週刊雑誌は1859年春から *All the Year Round* と名前を変えていたが、それに出た Gaskell の最初の物語が“Lois the Witch” (1859年10月8日号から22日号) で、ちょうど時期的に合致する。しかし後者を主張する J. G. Sharps は、“Lois the Witch” の現存する原稿は全部で117枚で、“200ページ以上になる物語のうち100ページ分が既にかかれていて”という記述とは矛盾すると言っている (354)。実際、*Night's Work* の原稿枚数を推定で換算すると218枚位になるだろう。長さの点では *Night's Work* の方が可能性が高い。しかもこの時期に200枚を越える story (novel でなく) となると *Night's Work* しかない。“筋がメロドラマ的で余り良くない”と言っている特徴も“Lois the Witch”より *Night's Work* の方に当てはまる。それに“Lois the Witch”はアメリカを舞台にした物語だが、もしこれが“Lois the Witch”なら、Gaskell がここでそのことに一語も触れていないのも不自然な気がする。それでもしここで言及されている物語が *Night's Work* とすると、作者は1859年3月には半分程書き上げていたことになる。

しかし *Night's Work* は構成の点から見て、全体が200枚位になるとわかっていて書かれたものとは思えない。また枚数の問題を別にすると“The Grey Woman”の可能性も否定できない。

③ [1859年] 6月2日付手紙 (L. 430) ——George Smith 宛。彼は月刊雑誌 *The Cornhill* を出版した。

私は一部が既にかかれた物語を一つもっています。それが3巻本になるかどうかは疑わしいですが。……私はそれをこの夏にせせと書き続けたい。

これも *Night's Work* であると考えられているが、②の手紙で“半分以上書き終えている”と書かれていたのに比べると、“一部が (partly) 書かれている”という書き方は、約3カ月後の記述にしては不自然である。それに3巻本にはならないだろうと言いつつもそれを射程に入れている書き方から言えば、むしろこれは *Sylvia's Lovers* (『シルヴィアの恋人たち』) の原型になるものかもしれない (勿論まだ Whitby へその資料を集めに行く前だが)。

④ [1859年] 12月23日付手紙 (L. 451a) ——George Smith 宛。

私は三つのものを始めてしまいました。……時間の順序で言って第1に、或る物語が書き始められました。その120ページが書かれていて、この一年半書かれてきたものです。余り良いものではないし、それは1巻本を越える長さにならないでしょう。それはC.M. 誌 [The Cornhill] には充分良いとは言えないものです——私はその点最上の鑑定人ですから——しかしH.W. 誌^a [Household Words] には充分良いと言えるかもしれません。これはかつてMr C. D. [Dickens] のために書き上げることを考えていた物語でした。……第2のものは多分40ページ位の長さになる物語。……第3は銚打ち頭の3巻本の小説で……まだ余り進んでいないけれど、私の頭ではとてもはっきりしていて、私がどれよりも書きたいと思っているものです。ただそうさせない唯一の誘引となるのは、第1の物語の4分の1を既に書いてしまっているということです。……第1の物語はC.M. 誌には充分良いと言えるものにならないだろうということを覚えておいて下さい。……それで私はあなたにそれをどんな条件でも手に入れて欲しいというわけではありません……。 (強調は原文)

ここで第1のものと言っているのが*Night's Work* と考えられている。余り良いものではないと強調している点、一年半前から書き始めて120ページ書いてあると言っている点で②のものと同じかもしれないが、既に書かれた部分が全体の4分の1に当たるといっている点で矛盾が残る。

⑤ [1859年] 12月27日付手紙 (L. 452) ——George Smith 宛。これはDickens が1859年12月20日付手紙で、6月までに400ページ位の連載ものを210ポンドで提供して欲しいと申し出たことに言及していると見られる。

私はMr Dickensに、彼が求めることは私はできないと言うために手紙を書きおきました。私は私の1巻本の長さの物語を細切れにするとしたらとても嫌だったことでしょう。ただ唯一の誘引となるのは四半分がすっかり準備されて私の傍にあるということでした。さもなければ幾つかの理由で、All the Year Roundには決して二度と書かないという決意をしていました [から]。

これは明らかに④と同じもののことを言っている。しかしDickensの申し

出た400ページの4分の1なら④で述べられている120ページに相当すると考えられるが、*Night's Work* の4分の1なら50ページ(枚)位にしかならないので(④同様に)数字が合わない。

⑥ [1862年5月1・2日] 付手紙(L. 505) ——娘のMarianne宛。

私の[行方不明だった]物語[の原稿]が見つかりました! そして私に150ポンドという、ただ誰にも言うてはいけませんよ、良い値! をもたらしてくださいようとしています。それがどこへ迷い込んでいたのか私にはわかりません。しかしManchesterから客車で水曜日に発送されたあと、それは月曜日までLondonに着きませんでした。しかし今日彼らはそれに良い値を付けてくれました。ただ何時彼らが私に支払ってくれるかはわかりません。(強調は原文)

これは *The Cornhill* 誌へ送られた“Six Weeks at Heppenheim”か“Cousin Phillis”とする見方と、やはり *Night's Work* (の一部)とする見方がある。ここではGaskellがすぐ次に続けて「Mr Smithは私のC. Hill誌に出した物語にまだ支払ってくれていない」と書いている書き方から見て、ここで「彼ら」というのはやはり *All the Year Round* の編集者たちのことを指しているだろう。とすると前者の二作品は当てはまらない(共に *The Cornhill* 誌から、“Six Weeks at Heppenheim”は1862年5月号に、“Cousin Phillis”は1863年5月号に出たのだから)。

しかし、ではこれは *Night's Work* (の、結末部分のまだ書かれていない原稿)かとなると、それも疑問である。というのはここで言及されている物語は既に完結している作品のようにも思われるから。もっとも次の⑦の手紙から *Night's Work* の原稿の一部がDickensたちに送られた可能性も否定はできない。⁵

⑦ [1862年9月末?] 付手紙(L. 517) ——上述aと同じもの。George Smith宛。

私は(多分)1巻本になる長さの物語で、ほとんど書き終えて4年間私の傍に置いてあった或る原稿のことをあなたに話したことがあると思います。それを今春私はいわば未完成でしたが‘All the Year Round’へ送りました。彼らはそれ

に対してすぐ私に支払いをしてくれました。結末の部分は、多分、‘No Name’に続けて彼らが契約している物語が出版されてしまうまで、彼らは求めないだろうと言いました。しかし今彼らは私の物語の結末を今月末までに手に入れるのが最も望ましいと書いてきています。(強調は原文)

これは間違いなく *Night's Work* のことを言っている。*All the Year Round* の巻頭作品として、Wilkie Collins の“*No Name*”の連載が1863年1月17日号で終わったあとすぐ24日号から出たのが *Night's Work* だったから。すると「4年間」「1巻本」に言及している点で④・⑤も *Night's Work* のことということになるかもしれない。

⑧ [1862年] 9月30日付手紙 (L. 518) —— 上述 b と同じもの。名宛人不明。

私はもうすぐ‘*All the Year Round*’に1巻本になる長さの或る物語を出そうとしています。それはそこに10回から12回にわたって連載されるだろうと思います。……その題は‘*A Night's Work*’です。

これは勿論 *Night's Work* である。これによると9月30日には最後まで書かれていた可能性がある。何故なら1862年11月21日付の Dickens の手紙 (共同編集者宛) で

Gaskell 夫人がもう彼女の物語に題を付けているのがわかった——最初の所の代わりに最後の所に。それは特徴的なものだ。あと一語付け加えれば印象的な題になるだろう。その物語を“*A Dark Night's Work*”と表題を付けろ。(Lewis x)

と書いていて、作者が題を“*A Night's Work*”と決めたのは、物語を最後まで書き終えたあとだったことが示されているから。

以上①～⑧の手紙で言及されている「物語」をすべて同一作品を指すと見て、それを *Night's Work* とすると (但し⑦⑧は別だが) 矛盾や齟齬を来す。手紙の日付も [] 付きのものは、ほとんど確実とは言え確定されたものではない。また作者が書き上げたページ数を必ずしも正確に述べていないかもしれないということも考えられる。たとえば“*Curious If True*” (「もし本当だったら不思議なこと」) の原稿は換算すると22枚位と思われるが、④では「40ページ位になる」と表現されている。

このようにこれまで *Night's Work* が1859年の早い時期にほとんど書かれていて、4年間作者の傍に置いてあったと見る論拠はそんなに明確なものではない。

ところで Gaskell は既に1851年に“Disappearances”(「失踪」)という作品を書いている。その中に *Night's Work* に関連する話が幾つか描かれている。一つは、近代社会では警察機構が発達したために、Caleb Williams のような話は起り得ないという記述(これは *Night's Work* で召し使い(御者兼厩舎の世話係)の Dixon が犯人にされかかったことに反映しているだろう)、もう一つは、Manchester の若い事務弁護士が地主の代理人として地代を回収したあと行方不明になり、人々には彼が地主の金を拐帯して海外へ逃亡したと見做されたが、50年後に、真犯人が、彼から金を奪おうとして抵抗されたため殺害して埋めたことを告白し、その通りに死体が発見された話である。また、少なくとも3代にわたって地主の土地代理人であり「尊敬すべき事務弁護士であった」(418)豊かな家庭の娘たちにも言及されている。従って、もともと *Night's Work* に近い物語への関心は1858年よりずっと早くから作者は持っていたのである。それが具体的に *Night's Work* として結晶するためには、そこに、作者の晩年の作品に共通するテーマが加わる必要があったと思われるのである。

それで筆者には以下に述べる幾つかの理由から、1858年半ばに将来 *Night's Work* になる物語が構想されたとしても、それはしばらく放置されたあとで書き継がれた、それは早くても1859年秋以降であると思われるのである。

a) 一つの理由は、この作品には第1・2章と第3章以降との間に内容的に中断があるように思えることである。一番大きい差違は Wilkins 氏の性格付けの違いである。第1・2章では、彼の職業への地主の蔑視が、彼の転落の最初の誘因であると説明され、性格悲劇に彼の職業人の問題が色濃く反映されている。たとえば第1章では Wilkins 氏は自分が法廷弁護士になれなかったことに大変こだわっている。そして第2章では「その青年はこの数年間恐らく多くの蔑視や屈辱をかなり静かに受けてきていて、それはさらに後年

彼の性格に影響を与えた」(5)と描かれている。しかし第3章で彼は娘 Ellinor の恋人になる Corbet が法廷弁護士を目指していることには何の感慨も抱いていない。彼はただ Corbet が大地主の息子(二男だが)である点に関心を示している。このように職業人の問題は、第3章以降は Wilkins 氏の中に具体的に跡づけられていない(この職業人の評価の問題はむしろ別の人物たちに引き継がれている)。また小さいところでは、第1・2章では Wilkins 氏は Eton 校での学校生活を満喫しているように描かれているが、Dixon の登場(第3章)以降は、彼にしばしば、Wilkins 氏は学校生活の辛さを語ったことになっている。

また犯行現場になる Wilkins 氏の書斎の描写が第2章では「大きな図書室から開いている小さな部屋」(8)とされている。が第4章では家の中でのその配置が異なるばかりか、建て増しされた時期の描写も第2章とは矛盾する。しかも第4章で作者は「これまでしばしば言及されてきたところの小さい書斎」(23)と表現しているが、言及されているのは第2章の上述の引用部分で1度だけである。また第4章での書斎の描写は、作者がここを犯行現場にする予定で記述していることが明瞭である。これも第3章以降で初めて作者がここを犯行現場にしようと考えたことを示している。

Wilkins 氏の父親が残してくれた邸宅の名前も、第3章で初めて Ford Bank と呼ばれ、「Edward Wilkins 氏は父の家を大陸へのグランド・ツアーから戻った時にそう命名していたのだが」(16)と過去に遡って説明されている。これもこの時(第3章)、Ford Bank が作中で重要な意味を持ち始めたことを示す。

b) 第2にこの小説には父と娘との親密な心の結びつきが描かれているが、この父親と娘との関係は、*Sylvia's Lovers*, “Cousin Phillis”, *Wives and Daughters* で作者が描いているものと多くの点で共通する。場面設定や表現の類似も数多く指摘できる。⁶そしてこれらの作品は共に1859年秋以降に書かれたものである。特に1864年8月号から *The Cornhill* 誌に発表され始めた *Wives and Daughters* との近さは明白である。作者は *Night's Work* で職業人失格の

物語を書いたあとすぐに、今度は逆に自覚的に生きる職業人の筋を *Wives and Daughters* で追求したと思われる。*Night's Work* の舞台になる町 Hamley (この名前は *Wives and Daughters* で主人公の一人の姓に引き継がれている) は、*Wives and Daughters* の町 Hollingford と同じ場所と見てよい。

c) 第3に作者は1858年に発表していた短編小説の“The Sin of a Father”という表題を、上でも触れたように、1860年5月に“Right at Last”と変更していること。Gaskell が雑誌初出時の表題を、後に単行本の短編集に再録するとき変更すること自体は珍しくはない。が、この場合は、作者がちょうどその頃(1860年頃)、それぞれに“父親の罪”を描いている作品“The Grey Woman”, *Sylvia's Lovers* そして *Night's Work* を執筆していて、その「父の罪」のテーマを余りに直截に示す表現を、既出作品の表題としては避けたい気持ちがあったと思われる。

d) 第4に、Ellinor が父の罪に関与してくる、その関与の仕方について。Ellinor は父の犯行を目撃してしまい、死体隠匿に手を貸した。この筋には Nathaniel Hawthorne の *Transformation* (『変貌』)(1860) の影響が考えられる。*Transformation* には Donatello の犯行を目撃する Hilda が描かれているが、この作品の内容について Gaskell は出版前に知っていて、[1859年9月20日] 付手紙(L. 441) で言及している。

e) 第5に、殺された Dunster の死体が18年後に発見されるという筋の展開について。*Night's Work* には第8章に Shakespeare の *The Winter's Tale* (『冬物語』) からの引用(「Autolycus の歌」(74) への言及)があり、約16年後に筋の劇的変化が起こることが予告されていると言える。この筋の展開には Shakespeare の利用の他に、1861年に出版された George Eliot の *Silas Marner* の影響も考えられる。勿論 Gaskell 自身上で見たように既に“Disappearances”で、何年も後に死体が発見されるという類似の話を語っている。が、死体発見に至る状況(*Silas Marner* も *Night's Work* もどちらも、16年或いは18年後、田舎にまで、近代化に伴って、土地に手を加える必要性が及んで来た結果である)、死体の身元確認や犯人の割り出しの描写(「頭文字のつ

いた時計や印形」(133)はもとより、*Silas Marner*では馬の鞭の柄に彫られた名前から、*Night's Work*では馬の放血針の取っ手に彫られていた名前から判明する)、最後の結末のつけ方(真相はごく限られた人々しか知らない)は、特に*Silas Marner*との共通性を感じさせる。発見される死者の名前が、ファースト・ネームと苗字との違いはあるが、Dunstan (*Silas Marner*の場合)、Dunster (*Night's Work*の場合)と大変よく似ていること⁷以外にも、Wilkins氏が乗る馬の一頭が作中でWildfireと呼ばれている点や、一時Dunsterの失踪について「Dunster氏はMoor Lane沿いに帰る時、道を見失って堀割にすべり落ちてしまったかもしれない」(60)と考えられている点(*Silas Marner*ではDunstanは採石場跡に溜った水の中にすべり落ちていた)には、むしろGaskellが意図的に*Silas Marner*との共通性を強調している感すらある。⁸

このように*Night's Work*の多くの特徴は、これが萌芽の構想は1858年にあったとしても、実際に創作されたのは1859年秋以降、それも結末部を除く作品の大部分は1860年から62年の初めに書かれたということを示していると言えよう。

John Sutherlandは*Night's Work*における時間の使い方の不正確さから、この作品の御都合主義を指摘した。確かに時間構成が緊密でないことは作品に緊張感を欠くし、⁹この作品が4年間という長期にわたって断続的に書き継がれてきたことを示す傍証となるのかもしれない。しかし*Night's Work*で見られる類の前後不照応は、この作に限らずGaskellの小説には時々見られるものである。それに作品時間の大枠(Ellinorが19歳の時に事件が起きて、18年後に死体が発見されるという)だけ見ると、第3章以降は、時間の問題が作品鑑賞に大きな支障を来すことはない。

従って*Night's Work*がこれまで余り高く評価されて来なかった一つの理由は、この作品に示されている作者の関心をあまりにも1858年時点のものに引きつけて考察されて来たせいであると思われる。つまりこの作品で作者は何を描こうとしたかが正確に読みとられてこなかったせいであると思われる。

Night's Work では1864年に執筆された *Wives and Daughters* に大変近いテーマが扱われているのである。

そこで筆者にはこの作品の中心テーマであると思われる職業人の生き方の問題を取り上げて、以下に少し詳しくこの小説を見てみたい。またこのテーマは作者の晩年の作品につながる興味深いものであるにもかかわらず、晩年の諸作品に比べて *Night's Work* の完成度が低いことも事実である。この作品の欠点は何よりも、罪を犯した人たちが正当に罰を受けていないところにある。この点を作者はどう描いているか、またその問題点は何かも併せて見ていきたい。

II. (1) Wilkins 氏——職業人失格

Gaskell は“父の罪”を題材にした小説を幾つも書いているが *Night's Work* ではそれを職業人のテーマとからめて描いている。罪を犯す父親が職業人であるだけでなく、主要な登場人物の多くが職業人である。先ず主人公 Wilkins 氏の場合から見ていきたい。

この小説は或る貴族的な小さな州の州都 Hamley で3代にわたって不動産譲渡手続を扱う事務弁護士の仕事をしてきた先代の Wilkins 氏の描写から始まる。彼は後に殺人を犯す Wilkins 氏の父親に当る。この先代の Wilkins 氏は *Wives and Daughters* に描かれる医者 Gibson 氏の職業を事務弁護士に置き換えたような典型的な職業人で、作者は彼らを通して一つの理想的な専門職業人のあり方を示そうとしている。この老 Wilkins 氏は「自分の職業上の手腕」(1)に自信を持ち、着実に自分の仕事をこなし、周りからも信頼されている有能な弁護士である。町一番の財産家で「Hamley 郊外に広々とした邸宅」(2) Ford Bank を所有している。彼はその地方にかなりな名声を保っていて、「20マイル四方の gentry の法律に関する仕事をすべて処理していた」¹⁰ (1)。

しかし息子の Wilkins 氏は職業は父親と同じ事務弁護士であるが、父親と違ってその職業に何の魅力も満足も見い出さなかった。彼は Oxford 大学に

入って法廷弁護士になるつもりだったのに、父親が「この〔事務弁護士の〕仕事は余りにももうかり余りにも多くの収入をもたらすので、他人の手に譲渡することはできない」（2）と考えて、息子を大学へやる代りにロンドンで1年間法律を勉強させたあと、2年間のグランド・ツアーに出し、その後は自分の共同経営者にしてしまったのである。それで息子の Wilkins 氏は「Eton 校の運動場でやっつけ、学習で打ち負かしていた地主の息子たちに対して、世襲の卑屈な地位」（2）につけられた。

ここには同じ職業人でも法廷弁護士や医者と違って、事務弁護士の場合は直接の雇い主がほとんど常に地主たちであるという、Wilkins 氏の不運が見られる。*Wives and Daughters* の Gibson 氏も内科医でなく外科医で、Wilkins 氏が法廷弁護士でなく事務弁護士であることで生じるのと同様世間の偏見に曝される。しかし Gibson 氏には、患者の地位とは相対的に独立した、医者としての実際的な腕前によって評価される部分も残されているので、そういう偏見を自分次第で無視し克服することができる。それに、地主以外の人々も彼の患者になり得る。しかし事務弁護士は地主の「不動産譲渡取扱人であり、土地代理人」（32）なのであって、基本的に召し使いと同じように彼らに仕える「卑屈な地位」（2）に居るのである。

州の有力者たちは Ellinor の父親の雇い主たちであり、彼らは執事のことを 'Simmons' として [敬称も抜きで] 話すのと同じように、彼のことをいつも 'Wilkins' として話した。(82)

作者は結婚観の違いを通して、医者と事務弁護士との社会的な立場の違いを描いている。Gibson 氏の場合は「地主の娘たちは実際、もし田舎の外科医などと結婚しなければならぬなら困った事態になったと考えるだろう」（114）と、彼は最初から地主の娘たちを再婚相手に考えない。つまり彼は自分の職業への地主たちの偏見を無視し、元家庭教師の今では小さい学校の経営者と再婚する。一方 Wilkins 氏も「すべてのお嬢様方の中には、代々事務弁護士であった家の事務弁護士などから結婚の申し込みを受けたら、侮辱されたと見做さない者は、一人も居ない」（5）と知っているが、「彼の職業を

冷笑する」(6) 地主たちの「多くの軽視や屈辱」(5) は日々の職業上のつき合いで生じるので無視することができず、結局彼は地主で「准男爵名簿」(同) に名前の載った家柄の貧しい孫娘と結婚する。

Wilkins 氏は、日々味わわされる「軽視や屈辱感」を、Gibson 氏や父親の Wilkins 氏のように、職業に「自尊心をもって」(1) 打ち勝つこともできたし、或いは次のように考えて、逆に地主たちを軽蔑することもできただろう。

[グランド・ツアーをし、芸術を見る目も備えた自分は] 旅行をしたこともなく教養もない地主たちよりも、知的趣味と素養とに満ちた人間 [である] (29)

と。実際、彼の妻は、「彼があらゆる点で、自分の [地主の] いとこたちより、どんなに優れているかを見るに十分な識別力をもっていた」(6)。だから Wilkins 氏にも、職業の社会的地位によるのではなく、人間的に優れていることと自分の職業の手腕への自信とから偏見を克服する道があった。作者はそうした生き方をする職業人を *Wives and Daughters* で Gibson 像を通して更に追求しているのである。

しかし Wilkins 氏が地主に比べて自分の「生まれの低さや劣った地位」(6) の埋め合せをするためにとった手段は、そういう近代人の自覚的な生き方ではなくて、「地所を持つ地主たちの生活様式や楽しみの真似をして、狩りに加わったりすること」(16) であった。それも父親の持つ莫大な金に飽かせて、常に即金に逼迫している地主たちを羨望させるというやり方、つまり金の使い方で優越感を示すという方法でなされた。彼は、息子に大学教育を与えなかったことへの一抹の良心の痛みを感じている父親から、「支払いについての白紙委任状のようなもの」(2) を与えられていた。

彼は父の金が彼に与える力に秘かな喜びを持った。彼は値については5分間話し合ったあとで高価な馬を買ったものだった。それについては州の誇り高い名家の一つの貧乏な後継ぎの男が3週間も値切っていたのだったが。彼の犬たちはどれだけ値が張ろうがイギリスで最上の飼育場からやって来た。彼の銃は最新で最も改良された造りだった。……彼ら [地主やその息子たち] は彼の所有する馬や犬を欲しがった。その若者 [Wilkins 氏] は彼らが欲しがっていること

を知って、それを喜んだ。(5)

これは一見 Wilkins 氏が地主たちを見下しているように見えて、実際には愚かな見栄を張る地主たちの生活を無批判になぞっているに過ぎない。

ちなみに先にも触れた彼の結婚に関わる問題は、*Wives and Daughters* と違ってこの作品では余り深くは追求されていない。彼の結婚相手は或る准男爵の孫に当る女性だが、父親は「成らず者」(5)で国外へ逃亡しており、「彼はもし再び自国へ入国しようと試みるならいつ何時法廷に連れ出されるかもしれない」(6)。Wilkins 氏とこの女性 Lettice の結婚は、形式的に見れば、彼が地主の真似をして擬似地主的に生きようとしていることの一つの象徴的なでき事と言える。しかし作者は Lettice を、「夫を深く愛し、彼を誇りに思う」(6)だけでなく、貧しいくせに地主として見栄を張るだけのいとこたちを軽蔑し、自らも趣味や芸術や家庭を愛する女性として、肯定的に描いている。また Ellinor が6歳の時に急死し、早々と(第2章で)物語から姿を消してしまう。従って作者が、Wilkins 氏の恋愛・結婚を通しては擬似地主生活を批判的に描く意図を持っていなかったことがわかる。

作者は代りにそれを次のように経済面での破綻を通して描いている。

Wilkins 氏は結婚後、また父親や妻の死後は一層、擬似地主として見栄を張るだけのものにお金を費す。

彼のワイン、彼の食卓のごちそうは、どんな地主の財布も審美眼も命じることのできないようなものであるべきだった。彼のディナー・パーティはロンドンの著名人たちも賞賛して注目するようなものであるべきだった。(7)

「スコットランドの荒野」(15)や、一年後にはまた別の場所に、狩りのための地所を確保し、シーズン中はそこに長期滞在をした。大金を使って「南ウェールズの貴族 De Wintons, or Wilkins 一族の傍係の子孫」(32)であると称する権利を買い、「扉と馬具に De Winton Wilkins の紋章を小ざれいに飾って」(17)ブルーム型馬車を乗り回した。

作者はこの時期の Wilkins 氏の生活を、事務弁護士という職業に対する地主の蔑視への抵抗というより、単に「義務」の放棄と呼んでいる。

彼の周りの人々のうち半数の者たちもほとんど同じようにやっていた。……しかし彼が付き合っている人々のほとんどの者たちにはするべき義務があり、彼が彼らの仲間に入っていない時間には、それを誠心誠意やっていた。そうだ！私はそれを義務と呼ぶ。……彼ら [地主たち] は自分たちの仕事を彼らなりにやっていた。……ただ Wilkins 氏だけが自分の職に不満でその義務を果たすことを怠った。(28-29)

Wilkins 氏には本ものの地主と違って何の「独立した財産」(82) も無かった。確かなのは「彼の父によって彼に遺されたかなりの額のお金 [と] その利子と、彼が自分の職業からあげる着実な収入」(40) だけである。だから彼が自分の職業を軽視し、ただ「肉体的に放縦な生活」(29) を好むだけの男へと墮した時、その擬似地主生活はたちまち、彼が優位に立とうとした地主たちと同じ、或いは定期的に年収の入る地主たちより何倍も酷い、経済上の困窮に直面する。

彼の家の財政はしばらく前から酷く困った状態にあった。彼はずっと収入を越えて生活していた。……多くの召し使いと馬、そして極上のワインと珍しい果樹、そして気まぐれを満たすことのできるどんな本や彫刻でも値段にかかわらず買い求める習慣のために、たとえ子供が一人しか居なくても、お金が使い尽くされていた。(40)

彼は「自分の陥っている事態の真の状態を調べる」(51) ための、「どんな規則的な計算」(40) をすることからも尻ごみし、先見の明の無い投資で「父親の貯金の一部」(同) を失い、それでも「大巾な経費削減」(同) も決して行おうとしない。そのうち即金に事欠き、召し使いへの給料も払えず (84)、遂に「彼は金貸したちに前倒しで高利で金を借りるようになる」(90)。

ここで彼が示している転落の軌跡は、社会的に地位の低い職業人の問題というより、作者が他の作品でもしばしば描いている没落していく地主たちのそれである。Wilkins 氏は擬似地主として、地主たちの没落まで真似たので

ある。彼の死後明らかになったように、彼は完全に破産していて、かろうじて、結婚時に妻と将来生まれる子供とに生涯不動産権が設定されていた Ford Bank の土地と建物以外、「その遺言者 [Wilkins 氏] によってかつて所有されていたかなりの財産のうちの……何一つ残っていなかった」(100)。

このように Wilkins 氏の生活は、彼が法律事務所の共同経営者 Dunster 氏を「事故」(55) で殺してしまうよりずっと前に、既に破綻していたのである。仮に Dunster 氏の殺害という悲劇が起らなかったとしても、Wilkins 氏の人生は十分に悲惨である。

彼の生活が事件の起こる前から既に悲劇の様相を帯びていることは、たとえば事件の数カ月前の描写として、

このところ何週間も、Ford Bank の家庭には何か調子が狂っているという感じがあった。Wilkins 氏はいつもの彼らしくなかった。そして彼がいら立っていない日々においてさえ、彼の元気の良いやり方や無頓着でにこやかな話しぶりは見られなかった。そして彼は自分自身にも周りの人々皆にも明らかに不安気であった。(44)

と書かれている。

また事件の約一年後、Ellinor が婚約者から破談の通告を受け取ったときも、Wilkins 氏は

「すべてが私と私の家族にとってまずくなっていく。あの夜より前にも、既にまずくなっていた——だからあれで済ませるのはやめよう、Ellinor？」
(強調は原文 93-94)

と言っているが、その通りである。

Wilkins 氏のような生活を送ってきた男 (擬似没落地主) にとって、あの殺害事件は、それさえ起らなかったらというような人生の転換点になる出来事だったのではなく、一路転落していく人生にただ一層弾みをつけるものであったに過ぎない。Wilkins 氏自身は事件直後には「一瞬の激情で、私の人生が爆破された」(55) と嘆くが、実体はそうではなくて、起るべくして起った、転落の象徴的な事件と言える。

実際、Wilkins 氏の生活態度は事件の前と後とで、本質的な点で変わるわけではない。事件前から彼は、先にも見たように、家の経済状態が危機に瀕していると直感しているにもかかわらず、その現実を直視せず、「怠け心と、行動を起こすとたちまち不快になることへの嫌悪」(42)とで、Ellinor の結婚の持参金を計算することすら一日延ばしに遅らせ、ただ「気分と血の巡りの刺激をワインに求めた」(44)。事件後は確かに精神的には自分の犯した罪への「厳しく鋭い罰が始まった」(67)けれど、生活の実態は、ますます現実から逃避しようとして、より強い酒を飲むという「肉体的欲望の野蛮化された習慣」(86)にのめり込むことであった。

Wilkins 氏は事件の約一年後、卒中で倒れて間もなく死んでしまう。こうして「彼はこの夜にやったことのためにひどく苦しんだ」(161)にせよ、作者は Wilkins 氏にその苦しみの期間を1年程と短い間にし、罪の発覚による社会的なまた法的な処罰に直面することもなく、あっけ無く病気で死んでしまうと描いている。つまり Wilkins 氏は本来なら法的に何らかの処罰を受けねばならないのに、その点では何の咎めも受けていないのである。事件から18年後に Dunster の死体が発見された時も、後に見るように、亡き Wilkins 氏の名誉は守られる。これは作者が Wilkins 氏の罪を免責していることを示している。

同じ頃書かれた *Sylvia's Lovers* では逆に、impressment (海軍の強制徴募)に反対するという、政府への反逆と見做される行為を実行した父親が処刑されると作者は描いており、厳しいリアリズムが貫かれている。そこからは Sylvia の父親は処刑されるような罪を犯していないのにそのような罰を受けることの理不尽さが伝わる。

それに比べると Wilkins 氏の最期の描写には、作者による Wilkins 氏の美化が認められる。つまり作者は Wilkins 氏を地主の真似をし転落の一途を辿ったかわいそうな男と見、同情を示しているのである。Wilkins 氏は有能な職業人として自信を持って生きていくこともできたのに、また知的生活ではその一部が Ellinor に引き継がれている豊かな趣味や芸術鑑賞の生活を送る

こともできたのに、事務弁護士への地主たちの偏見の目に負けてしまう気の毒な男と、作者は描いているのである。そして Ellinor が Corbet に語る言葉を通して、実際には作者が読者に、「あなたは彼を許さねばなりません——この世には是非とも許されねばならないことがあります」(97) と言っている。また「あなたがかわいそうなパパのことをできる限り優しく考えてくれることができたなら、私はうれしい」(161) と。

確かに Wilkins 氏の罪には、事務弁護士への耐え難い地主の蔑視という、情状酌量の余地がある。また作者は事務弁護士 Wilkins 氏の人生を、自分の野心のために Ellinor を捨てる法廷弁護士 Corbet の生き方と比べれば、むしろ人間的な弱点を示したものとして好意的に見ようとしていることがわかる。しかし Wilkins 氏の最期が社会的・法的に処罰を受けるというように、より厳しいものとしてリアルに描かれていれば、*Sylvia's Lovers* の場合のように、Wilkins 氏をそこへ追いやった原因の理不尽さが一層明らかになったであろう。つまり職業人事務弁護士の社会的に低い地位の故に起った悲劇というこの小説の主調が一層鮮明になったと思われるのである。(続)

※ 引用に当って、作品名、句読点等の表記の仕方は、原則としてそれぞれの原著に従った。

[註]

1. [] は手紙に年月日等の記載がなく、内容から日付が判断されたという記号である。
2. *The Letters of Mrs. Gaskell* 所収の手紙の番号を示す。
3. この手紙は *Further Letters of Mrs Gaskell* 所収 (194)。
4. これが1859年12月23日の手紙とすると、この時の Dickens の雑誌名は *H[ousehold] W[ords]* というのは間違いで、1859年春から *All the Year Round* に変更されていた。Gaskell は既にこの新しい雑誌の10月8日号から22日号に“Lois the Witch”を連載していたので、当然新しい雑誌名は知っていた。
5. Jenny Uglow は「[1862年] 8月28日に作者は ‘A Dark Night’s Work’ の原稿の

大部分を Dickens に送った」(502)と書いている。これは⑥の手紙の日付を1862年8月28日と解釈したものと思われる。尚、Uglow は *Night's Work* は「1857年半ばに書き始められた」(459)とも言っている。

6. そうした例は無数にあるが、たとえば本論では余り触れない“Cousin Phillis”との近似性を示す例を一、二挙げると、父親が娘をいつまでも子供と思っているところや、Ellinor (=Phillis) が Corbet (=Holdsworth) の手の触れたものを集めて宝物にしておくという描写、鉄道の田舎への普及を小説展開の重要な要素として利用している点等が指摘できる。*Sylvia's Lovers* とは、父親と娘との信頼関係以外に、召し使い Dixon (*Sylvia's Lovers* では Kester) の占める重要性の点でも共通している。
7. Felicia Bonaparte はその *Night's Work* 論(第XVIII章)で、Dunster のことを Dunstan と間違っ表記している。Bonaparte は *Silas Marner* の Dunstan と混同していると思われるが、二人の名前はこのように紛わしい。

ちなみに Bonaparte は、“Gaskell の作品には、「Mrs. Gaskell」という、ヴィクトリア朝社会通念に合致した上辺の姿と、彼女の本音(demonとして現われる)との葛藤が示されている”と見る、フェミニズム批評家である。そして「ヒロイン Ellinor の性格も個性も共に、Gaskell 自身にとってもよく似ている」(255)ので、*Night's Work* は、この葛藤が典型的に現われている作品の一つと見做すことができると言っている。

この Bonaparte の論では、たとえば Ellinor がイタリアへ行っている間に Dunster の死体が発見された点を巡って、次のように解釈されている。

“Ellinor がイギリスに居る間は、「イギリスでは犯罪と見做される demon」(257)は巧妙に隠蔽されているが、Ellinor がローマへ行くことでローマが Ellinor の demon を解放する(たとえば Ellinor はローマで束の間、芸術を鑑賞し少し生氣を取り戻す)。それと同時に、それまで隠されていたイギリスの犯罪が発覚するのである。比喩的に言えば、もともと Wilkins 氏は娘のために娘の demon を殺して埋めてやった。「Dunstan [sic] の墓に埋められて横たわっているのは彼女の demon なのである」(同)。従って Ellinor (と Dixon) は作中でしばしば「死んでしまいたい」と口にするが、イギリスでは彼らは *imagistically* (写象主義的)には既に死んでいる。しかし「Ellinor はローマで蘇るのである」(同)。”

この *Night's Work* 論は、*Night's Work* を高く評価する評論が少ない中で、この作品を積極的に評価しようとする姿勢を示しているが、物語全体の構成や筋

を無視し、場面や出来事を全く恣意的に解釈している点で到底受け入れ難いものである。

8. Dunster は第3章で登場する。ということは第3章からは1861年以降に書かれたことを示すかもしれない。但し Gaskell は、*Silas Marner* の出版前に書いていた原稿の固有名詞だけを、“The Grey Woman” の場合のようにあとで変更した可能性もある。

[1859年] 12月27日付手紙 (L. 452) (本論引用⑤のもの) には、“The Crooked Branch” (「曲った枝」) について語っている中で、「もし人々が一瞬、それは G[eorge] E[liot] の作品だと考えるとしたら」と、自分が Eliot と間違われることを自ら想定している記述もある。

9. たとえば第12章の記述から、事件が起ったのは1829年とされるが、「その時 Ellinor は19歳位であり」(Lewis, Notes 310)、彼女は1810年生れになる。しかし同じ章の数ページあとで、召し使いの Dixon が21歳で亡くなった恋人 Molly の墓へ Ellinor を案内する時、その墓には Molly は「1818年没」(125) と彫られている。とすると Molly の死は Ellinor が8歳位の時のことで、彼女は幼いときから Dixon とは“友だち”だったのだから、彼女が Molly (先代の Wilkins 氏の時の皿洗い女中) の存在及びその死を知らなかったというのは不自然である。よく指摘される Ellinor の家庭教師 Miss Monro の年齢設定も御都合主義的である。

時間の齟齬と関連して、一点重要な前後不照応として、事件直後から Ellinor は大病をしたが、その時 Corbet がロンドンからすぐ見舞いに会いに来たかどうかに関するものがある。第7章では、彼は心配して毎日、様子を尋ねる手紙を Miss Monro 宛に出していたが、「Ellinor が彼に会ってもよいという医者への許可の、ほんの僅かのほのめかしが示されるや否や、彼はすぐにやって来た」(64) とある。従って彼は Ellinor がどんなに酷い病状であったかを、直接見て知っているはずである。これは7月中旬か末頃のことと考えられる。しかししばらく後の8月の休暇で回復後の Ellinor に会いにやって来た時(第8章)、彼は彼女の容貌の大きな変化に驚くが、それは彼が彼女の病状について、「病気のどんな説明も、彼に心構えさせていなかった」(71) からであった。そしてその時初めて Corbet は「Ellinor は酷く重病であったことを納得させられたのである」(72)。このような第8章の記述は、Corbet は Ellinor の病気後初めて彼女に会ったような印象を与える。

Corbet がこの時感じた大きなショックが、後に Ellinor への愛情を失っている

く切っ掛けになったのだから、この点での齟齬は気になるところである。

10. これは *Wives and Daughters* の中の、「Gibson 氏は Hollingford の周り15マイルの円内に住む、全ての gentry の治療をした」(60) という描写に相応する。その他 *Night's Work* と *Wives and Daughters* との直接の近似を示す描写は数多くある。

Works Cited

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville and London: UP of Virginia, 1992.
- Chapple, J.A.V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Chapple, J.A.V. and Alan Shelston, eds. *Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 2000.
- Eliot, George. *Silas Marner*. 1861. *The Writings of George Eliot: Together with the Life by J.W. Cross*. Vol. 7. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1908.
- Gaskell, Elizabeth. "Cousin Phillis." 1863. *Cousin Phillis and Other Tales*. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1987.
- . "A Dark Night's Work." 1863. *A Dark Night's Work and Other Stories*. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1992.
- . "Disappearances." 1851. *Cranford and Other Tales. The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A.W. Ward. Vol. 2. New York: AMS, 1972.
- . "The Grey Woman." 1861. *A Dark Night's Work and Other Stories*. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1992.
- . "The Sin of a Father." 1858. ("Right at Last." 1860.) *Cousin Phillis. The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A.W. Ward. Vol. 7. New York: AMS, 1972.
- . *Sylvia's Lovers*. 1863. *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A.W. Ward. Vol. 6. New York: AMS, 1972.
- . *Wives and Daughters*. 1865. *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A.W. Ward. Vol. 8. New York: AMS, 1972.
- Hawthorne, Nathaniel. *Transformation*. Feb. 1860. (*The Marble Faun*. Mar. 1860.) *The Marble Faun: or, The Romance of Monte Beni*. Penguin, 1990.
- Lewis, Suzanne. Introduction. *A Dark Night's Work and Other Stories*. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1992.

———. Explanatory Notes. Ditto.

Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works*. London: Linden, 1970.

Sutherland, John. *Is Heathcliff a Murderer: Puzzles in 19th-Century Fiction*. Oxford UP, 1996.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

**A Study of Elizabeth Gaskell's *A Dark Night's Work*(1):
On Mr. Wilkins, a Professional Man,
Who Led a Life of Defeat**

NAKAMURA, Shoko

A Dark Night's Work was published in early 1863 in a literary magazine, *All the Year Round*. Gaskell's letters suggest that she began the story in 1858 and finished more than half of it by March 1859, that it remained unfinished for about three years, when she sent it incomplete to Charles Dickens, the editor of the periodical, in early 1862, and that the rest of the story was written in the autumn of 1862. It means that it took Gaskell about four years to complete the story. Most critics agree with this assumption. However, there is some doubt about the time when the author actually wrote the novella. Other elements, such as the structure of the story, the names of the characters, place names, plot development, and, above all, the theme itself contradict this suggestion. They provide evidence that the author wrote most of the story beginning with Chapter 3 during and after 1860. Furthermore, the evidence implies that the story is more closely connected with the works written in the last stage of her life than with her stories published around 1858. This novella possesses its own peculiar charm when compared with other works published in her latter years.

A Dark Night's Work is a kind of crime fiction. An accident happens as follows. Mr. Wilkins, an attorney, hits his partner, Dunster, irritated by him. The blow kills Dunster. However, Dunster's death was really an accident, as the author emphasizes. Mr. Wilkins, his daughter Ellinor, who unfortunately witnesses the accident, and his loyal servant Dixon work together to hide the body in a quickly dug grave in Mr. Wilkins' garden. After great affliction Mr. Wilkins dies of apoplexy one year later. Seventeen years pass. When the body is found during a railroad construction project, the servant Dixon is arrested. Because he does not defend himself in court to guard the honour of his dead master, he is

sentenced to death. However, Ellinor saves his life because she secretly meets her former lover, who is now a judge, and tells him the truth.

The first half of the story explains how Mr. Wilkins may have been driven to giving a blow to Dunster. His job as an attorney is to manage the conveyance of property among the landed gentry. He is always exposed to humiliation and contempt by the gentry, who are his employers, though he is richer than they are. He imitates the way of life and amusements of the gentry in order to escape humiliation. He is financially ruined because of his extravagance. Only Dunster notices the situation and tries to comment on that matter. However, Mr. Wilkins is always irritated by the junior partner's interference.

Thus, Mr. Wilkins' life had been destroyed long before Dunster's accidental death. Without the accident, Mr. Wilkins' life was already one of defeat. The author is sympathetic with his tragic life, and Mr. Wilkins is neither socially nor legally punished. The low social position of the attorney is regarded as the main cause of his crime. Mr. Wilkins could not overcome the social prejudice. However, Mr. Gibson, one of the heroes in *Wives and Daughters*, the author's last novel, will eventually overcome it through professional pride.

(To be continued)